



皆さんと一緒に「子育てファイル」(仮称)の実現を

稚内市教育委員会 教育長 表 純一

稚内版「子育てファイル(仮称)」＝(以下「ファイル」と言います)の必要性と有効性を訴え、実現に向けて多様な活動をお願いしているところです。

このファイルの発想は、障がいを持つ方への支援ファイルに端を発しているのは言うまでもありません。

全ての子どもが発達段階に応じて、より良い支援を受けるためには、保護者と関係機関の間で情報の共有化が円滑に行われることが重要であります。

今までも、保護者が子どもの保育所、幼稚園の利用や就学に際し、そのステージが変わるごとに、これまで受けてきた支援の内容や子どもの特徴を初めから説明しなければならず負担になっているとか、説明した内容が十分に伝わらず、保育所、幼稚園、学校の担任が代わったりすることで、支援に反映されない場合があるとの懸念が示されていました。

しかし一方でこのファイルが、希望者や障がいのある子どもや疑いのある子どもの保護者のみを対象とすることは、人権という立場からも避けるべきで、配布方法は、子どもを持つ全ての家庭とすべきだというのが有識者の見解でもあります。

ファイルの説明をした稚内市子育て推進協議会等の中でも、このファイルについては、

- ・子育てをしている保護者が子どもの成長に喜びを感じることが出来る
- ・記録することにより成長の過程を振り返り、子供の才能や可能性に気付くことが出来る
- ・結果として保護者力(親力)の向上につながる

という肯定的な意見が多く出されましたが、一方で当然導入に向けての困難性を指摘する意見も多数あったのは事実です。

このファイルを本市で導入する場合、最も重要な役割を担うのは学校であります。学校での取り組み状況が、このファイルの成否を決定するといっても過言ではありません。当然学校だけの取り組みでこのファイルの有効性が高まるものではなく、保護者の自主的な取り組みは勿論、関係機関の理解と協力が必要です。

だからこそ、このことの難しさを承知している学校関係者に困難性を指摘する発言が多いのだと思います。

本市のファイルは1年を1ページで記入することを基本としていますが、今の保護者の状況をよく知る教師だからこそ、このことの大変さがわかるのだと思います。

平たく言うと、非常に有効な施策だが、実現するには大きな労力が必要だということです。それも学校現場、一人一人の教師の熱心で献身的な活動がなければ、導入しても定着する事はないと断言できます。

過去においても、このような課題に真正面から立ち向かってきたのが、稚内の教育、市民ぐるみの子育て運動ではなかったのでしょうか。

困難だから、壁が高いから立ち止まるのではなく、乗り越える力、運動力が求められていると思います。

その先頭に立っていただくのは学校現場＝教師であり、校長のリーダーシップが求められています。

子育てファイルがこの街に定着し、実用的に活用されている姿を思い描いていただきたい。

それは、子供たちの健やかな成長が保障され、子育て運動が更なる発展を遂げている姿ではないでしょうか。

ウィリアム・アーサー・ワードは、「偉大な教師は生徒の心に火をつける」と言っています。

教師の心に火をつけるのは、校長にしかできないはずで。



稚内市の『子育てファイル』の特徴

『子育てファイル』プロジェクトチーム 加藤 良平
(稚内市適応指導教室つばさ学級室長)

平成18年9月に学校教育法が改正され、翌年4月から施行されました。これは特殊教育から特別支援教育への移行です。この時に一人ひとりのニーズに応じた個別の支援計画を作ることが提起されました。

それを受けて稚内市でも、支援計画作りに入っていきます。その時に特別な教育的ニーズのある子どもは、特別支援教育の対象になっている子どもだけなのかと言う問題が浮かび上がってきました。現実には虐待を受けている子、イジメを受けている子、経済的に困難な家庭で育っている子、親と離ればなれになっている子等々、様々な子ども達がいることが改めて確かめられました。子ども達を取り巻く厳しい現実を考えると、特別支援教育の対象になっている子どものみに個別の支援計画が必要なわけではなく、多くの子どもに必要なだと言うことが理解されてきました。そこで、稚内市では全ての子どもに「子育てファイル」を届け、記入していただくことを呼びかけています。また、特別支援教育を受けている子どもだけが「子育てファイル」を持つとすると、ファイルを持っている親は、我が子が特別支援学級に在籍していることを知らせているようなものです。そんなことはするわけにはいきません。子育て平和都市宣言の街稚内市にふさわしい取り組みにしたいと考えています。また保護者の負担を少しでも軽減するよう、内容的には母子手帳と重ならないように配慮しました。

ファイル作成の段階では、多くの人たちの手を借りて作り上げようと、これまでに子育て推進協、幼稚園・保育所の先生達、市連P、ヒラソル、市保健課の保健師さんたち、校長会、教頭会等と話し合いを持ってきました。事務局が出かけていき説明し、質疑を受け、後日アンケートに記入していただき、内容や様式を改善するために使わせていただいています。完成までにはできるだけ多くの方々の声を聞こうと考えています。関係者のみではなく、多くの方々の意見を聞きながら作成していくことも、稚内市の子育てファイルの大きな特徴です。

形は整ってきましたが、実際に取り組む段階になると保護者が記入してくれるのだろうか、と心配になります。確かに保護者の自主的な取り組みですから、大変困難です。しかし困難でもこれを乗り越える、それも多くの方々の力あわせで乗り越えることが、教育の現状を考えたときとても大切な課題です。そのために、保健師さんの力、保育師さんの力、先生達の力、PTAの力が必要です。ファイルに記入することを個人任せにするのではなく、多くの方々の力で支え合い、励まし合っていくことが大切です。たとえば学級PTAの集まりでみんなで話し合いながら記入することもできるでしょう。保健師さんと話し合いながら記入することもできるでしょう。様々な工夫が可能になると思います。

稚内市の子育て運動は30年以上の歴史を積み重ねてきました。この子育てファイルが稚内市の子育て運動のより一層の質の向上につながると考えています。

困難は目に見えています。困難だから避けて通るのか、みんなで力を合わせて乗り越えようとするのかの違いです。私たちは市民ぐるみの力でこれに取り組みたいと考えています。



『子育てファイル』づくりに寄せて

稚内市校長会 会長 鎌田 正之
(稚内東小学校校長)

「子育て・教育は親育ち・教師育ち」と言われます。その親育ち・教師育ちが、難しい時代になってきています。「困っている子」「困っている保護者」「困っている教師」が増えてきています。

「子育て運動の街稚内」においても、それは例外ではありません。

そうした中、稚内では、「校長の方針のもと学校がチームとなって」「学校・家庭・地域が連携して」「幼保・小連携、中学校区における小中連携の力をもって」「関係者による子育て支援ネットワークを構築して」「子育て推進協議会・子育て連絡協議会によるイベントや運動を通じて」子育て力・教育力を高めることに努めてきました。それらの先進性は道内・全国と交流すれば明らかであり、その成果は確かなものがあつたと考えます。

しかし、「稚内の子育て力・教育力をいっそう高めなければ」「教育の基盤としての子育て運動をいっそう深化させねば」という声は大きくなる一方です。そのことは、現在取り組んでいる共同の営みのさらなる前進が必要であり、求められていると受けとめています。

学校と教職員は、学校教育の責任と子育て運動の「心棒」としての役割を担っています。ですから、現在の困難を打開する力を発揮してほしいという期待をひしひしと感じています。

と同時に、現在でもありったけの力を必死に結集して課題に立ち向かっており、責任と役割の重みにしんどい思いもないわけではありません。

そんな時、稚内版『子育てファイル』が提案されました。

正直、いろいろな思いがありました。どんな力を発揮できるだろうか、と不安にもなりました。

けれども、『子育てファイル』には、これまでの運動にない可能性があると思に至りました。それは、子育て運動を、子を持つ一人ひとりの親に浸透させうる可能性です。わが子へかけた愛を文字や記録に残し、わが子と共に笑って泣いた歩みを親自身がフィードバックできる『ファイル』は、親育ちを促すと共に、親が自分自身への信頼感を大きく育てるものになることでしょう。

私事ですが、今年になってたまたま、段ボールの中にしまわれていた、成人したわが子の保育所時代の『お便り帳』を取り出して読む機会がありました。保育士さんと我々夫婦（といっても、ほとんどは母親ですが）との交換日記の中に、小さかったわが子の微笑ましいエピソードとおろおろしながらも大丈夫を装っているまだ若い親の姿を見いだした時、心の中に温かいものが広がりました。

『子育てファイル』も、いずれ、親と子の宝物となり、保護者を激励するものとなることでしょう。

『子育てファイル』が稚内で定着し、日常の中の当たり前のものになっていくのには、何年・何十年とかかることでしょう。そのスタートの段階に立ち会えた幸せを感じています。

保護者を激励し、親力を高め、子育て運動をいっそう稚内で根付かせていくために、校長は教職員に対して『子育てファイル』の可能性やその活用についてわかるように示し、学校ぐるみで保護者・PTAにその価値を伝えていく運動のリーダーシップを発揮する役割を担っています。

その役割の発揮のために、何をどうすべきか、考えを巡らせています



稚内市の子育て運動と『子育てファイル』の意義

稚内市公立学校教頭会 会長 佐々木 康

昭和53年に始まった稚内市の子育て運動は、全国にも誇れる素晴らしい運動です。30年以上の長きにわたり、たくさんの先輩たちが努力し作り上げてくれた稚内市の至宝です。昭和50年代の非行防止運動が原点ですが、途中「子どもを守る」から「子どもを育む」という視点への転換が図られました。もっと全人格的で総合的な運動へと発展し現在に至っています。子育て運動をさらに次の世代へと継承・発展させていくことは、学校・教育関係者の責務です。そのためにも学校・家庭・地域の力合わせが、益々必要になってきていると言えます。

これからの子育て運動を展望するとき、その発展の大きな鍵を握るのは、やはり「現役子育て世代の親」の意識向上であり、教職員と保護者との関係力向上です。そのためには学校やPTA等の組織的な働きかけが重要になってきます。学校と家庭が一体となり、活動を通して親同士がつながりを深め、子育てを支え合うこと。そしてPTA現役世代の保護者がより主体となって子育て運動に関わるシステムを生み出すこと。今稚内市の子育て運動は、外側からの働きかけや体制づくりとあわせて、その核となる部分にも栄養を注入していく必要があります。

この度提唱されている「子育てファイル」は、稚内市のすべての子どもの親に配布され、子どもの成長の様子や子育ての喜びや苦勞などを、親が毎年記録していくものです。保護者は記録することにより我が子の成長や子育ての有り様を振り返り、親育ちを図ることができます。また、子どもが成長して大人になったとき、このファイルは親にとっても子どもにとっても家族が共に歩んできたアルバムとして、さらに輝きを放つ存在になるかもしれません。

このファイルの取組は、稚内市で大切にしてきた子育て運動の新たな側面からのアプローチだと考えることができます。これまでの子育て運動は、多くの教育関係者が力を結集させる中で現役世代の親を巻き込んできたうねりでした。それに対しこのファイルは、現役親世代一人ひとりに働きかけ、子どもの成長を支えます。内部からの変革を実現する大きな可能性を持ったツールです。子育て運動の核心部分に養分を与え、根元から太くしてくれることでしょう。

でも良いものだと分かってはいても、「親は本当に書けるのだろうか?」「続けることは難しいのでは?」などの疑問が出ることは予想されます。また「学校現場の負担が大きくなるのでは?」との不安を抱く先生もいるでしょう。確かに初めての試みでもあり、様々な障害や困難が予想されます。そう簡単には進まないかもしれません。しかし、だからこそ逆に課題を乗り越えていくための話し合いが生まれます。また、「放っておいてはなかなか書けないし、続けることは難しい…。」だからこそ、学校と親あるいは親同士のつながりを強めるための取り組みが必須となります。つまり「子育てファイルを浸透させる取組」自体が、そしてその困難性自体が、学校と保護者あるいは保護者同士のつながりを強く求める性質を持っています。

ですから、このファイルの意義や有効性、そして困難性も含めて、まずは話し合いを進めていくことが大切かと思います。そのこと自体が稚内市の子育て運動にとって、新たなステップになるのではないのでしょうか。「ファイルを書ける」稚内市民の姿は、教育関係者や教師と親あるいは親同士がより強固につながったとき、現実の像として鮮明になってくると思います。